

# 釣れ釣れなるままに

2007年思い出の釣行記 PART. 7

# ケムシがカ

## 鹿島釣狂

### 岩見沢釣遊会第6回大会

☆開催日	平成19年10月21日
☆開催場所	井寒台入口～様似港
☆入釣場所	幌島
☆天候	波3m後4m 強風
☆釣果	アカハラ 293 mm 2
	ハゴトコ 270 mm 2
	重量 740g
☆成績	537点

### 応援歌 「♪負けないで」

女房が古キズを患い、手術のために9月末から1ヶ月間ほど北大病院に入院した。順調に回復しているが、大事をとって奈井江の借家（私）とは離れて岩見沢の自宅で療養に励んでいる。勤務に加えて食事の準備から洗濯、掃除と何かと慌ただしいのは我慢できる。しかし、勤務を終えた釣瓶落としの夕暮れ時に家路につき、玄関灯の明かりもなく、薄ら寒い居間のストーブに火を入れる時が侘びしさを募らせる。何より、静寂の中での晩酌が

一番辛い。気楽だといえれば聞こえはいいのだが、独身時代を謳歌するようなものでは全くない。不思議なことに早く女房の「アレコレ・シカジカ」という喧噪の中で生活したいものだと思ってしまうのだ。古キズに「♪負けないで」頑張っで欲しい。そんな中で、岩見沢釣遊会第6回大会を迎えた。

いつもお世話になっている釣具店の品揃えが少なくなってきたように思える。以前は高級品の釣り竿やリール、活きのよい釣りエサが所狭しと棚に並べられていたが、量販店の品揃えと似たようなものになってきているのではなかろうか。市内に大型チェーン店が進出してきてから、そちらにお客が流れているのが原因の一つだと思われる。ホウムラの「ソイ・アブラコ・カジカ」が見当たらないので店長に聞くと、入荷出来ていないと申し訳なさそうに言う。

店長は私の苦手な分野のルアーやフライについても、新製品を片手に丁寧に説明してくれている。奥さんも甲斐甲斐しくレジ打ちを手伝っている。先代は店の中央に置いたテーブルにお客を招いて、お茶のサービスとさりげない話題でもてなしてくれている。何よりお客を迎えるときの笑顔を大事にしてくれて、釣り場の近況情報なども知らせてくれる。そしてこれが肝心なのだが、釣り人の「法螺話」にもウンウンと肯きながら耳を傾けてくれている。

我々消費者は値段の安さだけに目を囚われがちだが、一方で価値のあるものや人と人との絆をも大事にしたいと思っているのだ。釣り具を揃えるだけなら量販店だけでもよい。交流を深める場を提供することで釣り人が集い、そのついでに商品にも手を伸ばすと思うのだ。時勢の厳しさに「♪負けないで」の応援歌を贈りたい。

## 蕪茶らない、記憶

朝から強い風を伴って雨が降っており、日高地方の天気予報では暴風雨・波浪・雷注意報と伝えている。集合場所にあるヤクルト販売店の軒先を借り、雨宿りをかねて西川氏と釣り四方山話に花を咲かせていた。すると突然、販売店の中から女性が出て来て、一瞬怯えた顔を見せる。「ヒー」という叫び声こそ聞こえなかったが、それを飲み込んだような様子とその恐怖を物語っていた。勤務を終えて、いざ家路へとドアを開けたら、そこに普段は見慣れない汚い格好のオヤジがいたので、不審者とも思ったのだろう。歩道に置いてある荷物で釣り人だと気付いたらしく、気丈にも「これから釣りですか。お気をつけて」と暗闇に消えていった。我々がたむろしている光景は通行者にとっては胡散臭いものに映っているのだと思える。

バスがいつもより早く到着して、会員も揃っていたので予定の時刻を30分繰り上げて出発した。バスの中で、前回までの成績記録表が配布された。前回の第5回大会は視察研修と称する仕事上のお付き合いのため、参加できなかった。札幌ドームで日ハム・オリックス戦を応援することになったのだ。当時、ファイターズはライオンズ、ロッテと三つ巴の闘いをしており、その日も稲葉、稲田ジャンプをしながら声を張り上げたが、残念ながら

ら負けてしまった。

私の4回目までの成績は⑤①①④の11点で、嵐、吉井氏とともに三つ巴の闘いをしているようだ。過去4回の大会では全く経験のない新しい釣り場で好成績を収めた。そのジnkスを担いで今回も、入ったことのない釣り場候補を物色していた。特に最近ではタカノハに的を絞って大会を制している釣りの会員が増えてきているという。本日の範囲では赤川河口から幌別川河口までが有望である。しかし、この砂浜は時化には大変弱いときている。混戦模様となってくると危険を冒すのはできない。前年度、やはり嵐の中で優勝を遂げた幌島に釣り場を決定する。

23:00現地到着し、堀内氏と共にバスから降りるが、去年の記憶が蘇らない。バス停からの階段を下りていくが、こんな階段を使っただろうか。去年はなだらかな坂を下っていったような気がする。そして、途中から浜に出たのだ。訳がわからず去年の場所を探しているうちに、堀内氏が場所を確保した。堀内氏の背後の民家を見るとそれらしき記憶がようやく蘇ってきた。私も堀内氏から少し離れて釣り場を設定する。

## キレた道糸と気力

堀内氏には随分と遅れをとったが、ゴロ仕掛けにピンコアカハラが1本来た。すると、比較的穏やかだった磯波が急に騒ぎだしゴロ仕掛けがすぐに流されて渚に打ち上げられる。重い鉛に変えて中投を中心に何とか3本打ち終えてから堀内氏を訪ねると、「入釣後すぐにアカハラがパタパタときて4本そろった。オマケに嫁となるハゴトコもきた。」と事も無げに言う。それは私がモタモタしていたほんの数分間の出来事だったらしい。

何度も打ち返すが、反応がないので、左手白泉までの舟揚場の確認に向かう。白泉まで並んだ9つの舟揚場を見学したが、釣り人は誰もいない。去年は舟揚場の一つ一つに釣り人がいたはずだが……。去年、佐々木氏が入った〇つ目の舟揚場に移動した。

舟揚場の両脇にある壁が風よけとなって、竿や私自身は風を何とか凌げるが、壁から出た道糸は風下に向かって大きな弧を描いてヒューヒューと鳴り響く。魚の反応も全くない。その内にその舟揚場付近にゴミが寄り出した。初めのうちは仕掛けに絡まったゴミを何とか持ち上げて絡まりを解きながら対応していたが、いよいよゴミが大きな大きな団子状態となって、持ち上げることはできず、引き波に合わせてキーンと道糸を鳴らしては切れてしまう状態に陥った。辛抱強いはずの私もさすがにキレてしまった。酒をリュックに隠ばせて釣り場に入っただけなのに、普段はそれに手をつけることはなく、竿を仕舞った後に飲んでいただけなのに、今回は手を出してしまった。ワンカップ2杯目にも手を出し、それを飲み終わると気力も失せて、竿も仕舞った。そして、しばらくそこで茫然と佇むことになった。

## エサはカモメに

背後の山並みの稜線が見えるようになり、民家の電灯もほの暗くなってきた。まだ、薪

を使ったストーブを利用しているのだろうか。煙突から出て来た煙が風下に向かって真横になびいてはスッと消えている。ふと我に返り、カジカ1本でも手にしたいと活動を開始する。いつの間にか姿を消していた堀内氏が白泉の舟揚場に入っており、タカノハを狙って赤川に向かった前野氏とその隣の舟揚場で竿を出していた。堀内氏は移動時にリュックをどこに置いたか忘れてしまい、捜すのに手こずったそうだ。最近では100円ショップで売られている蛍光棒を荷物の目印にしている釣り人も増えてきていると聞いているのだが・・・。

線路を伝って月寒に向かって歩き出す。山岸、谷口氏がいる月寒川まで歩いてみたが、波は白泉よりはるかに高く、人っ子一人いない。結局、波が一番治まっている初めに入った場所に戻って再び竿を振ることになった。そこから50号の鉛で遠投しながら月寒方向に少しずつ移動する。なんとかハゴトコ2匹を釣ることができた。

締め切り時刻を待たずして、侘びしく荷を片付け始めると例のごとくカモメやカラスが集合してきた。私は、釣りの最中はエサをまき散らさないように気を使っている。エサ替えの度にそこらに投げて散らかしていると、それが海面に漂い、それを狙ってカモメが急降下して啄んでいく。その途中でカモメが道糸に絡まってしまうことがあるからだ。砂浜に落ちた使い古しのエサなどどうでもよいのだが、その周りに集まって来たカラスにグワーッ、グワーッとやられるのが煩わしい。

荷をほぼ片付けてから近くで佇んでいるカモメにカツオを1切れだけ投げてやる。すると、そのカモメが歓喜の一声を上げたたん、一斉にカモメやカラスがこちらに向かって集合してきた。そして、ヒッチコックの映像のような群れとなった。カモメは低空飛行で頭上に漂っている。残ったカツオを空中高く投げた。若いカモメは時々失敗するが、老獺なカモメは翼を翻して一口でキャッチする。落ちたカツオにはカラスが群がった。

## 提灯アンコウ？

9；40に幌島のバス停に転がり込んだ。すると、けたたましく携帯電話が鳴った。堀内氏から「アブが来た」と言う。やはり執念の堀内氏である。最後の最後にアブラコを抜き上げたのかと問い返すと、「アブではなくバスだ」と言うのだ。この海の状況から判断し、様似発のバスが10時前にスタートしたらしい。携帯で連絡を取りながら会員の状況を確認し、運行している模様である。

月寒に下りた谷口、山岸氏の姿がやはり見当たらない。彼らは月寒の高波に恐れをなし、竿を一度も出すことなく3km程離れた浦河港に移動したのだという。バスが浦河港にさしかかった時には、今まさにくつろいで酒を酌み交わそうとしているところだった。

成績は、井寒台に入釣した西川氏が唯一40cm越えのカジカを手にしており、嫁のアカハラも揃えて優勝した。準優勝は前野氏で、赤川のタカノハは叶わなかったが、白泉に移動してからカジカとアカハラを揃えた。向別川でアカハラを狙った吉井氏も結局井寒台まで移動し良型ソイを上げて3位に入賞した。アカハラねらいに切り替えた会員が上位を独

占した形になった。特筆すべきは大前氏が謎のカジカを手にしてきたことだ。私は初めて見るカジカだが、口の周りにひらひらと飾りを付けており、提灯アンコウのようにそれを揺らして獲物をおびき寄せているのではと思える形相をしている。審査対象外とのことだが、なかなかの面構えであった。



優勝の西川氏「いいカジカでしょう」。大前事務局長「私のもいいカジカでしょう」。しかし・・・



そのカジカは、眠そうな瞳がとても愛らしいカジカだった。逆さにすると頭に長い突起を付けているのが分かる。提灯アンコウのように頭に付けた飾りを揺らして獲物を捕る？ そんな風貌だ。以前、仲間が音調津港で釣ってきた見慣れないカジカは、シラミカジカと

命名されたが、審査対象魚になったと記憶している。他にカジカで聞いている名前はトゲ、ヤリ、トウベツ、ギス、オニなどである。「磯カジカ」や「真カジカ」「鍋壊し」「花魁<sup>おいらん</sup>カジカ」は俗名として付けられているものと思われる。また、普段、私たち釣り人が手にしているカジカの正式和名が「ギスカジカ」ということらしい。砂場でのカレイ釣りなどでよく釣れて、ウンザリさせられている黄色にオレンジの縞模様が入ったものには別の名前が付いているらしい。今回は先輩諸氏によって「ケムシカジカ（トウベツカジカ）」と診断されたが、審査対象外ということだった。